

「遠山名誉会長に感謝する会」

記念インタビュー

当協会設立にご尽力いただいた遠山名誉会長がJSTT第16回定期総会において理事の役席から降壇いたしました。17年という長い年月を協会設立以前から非開削技術と共に歩んでこられた歴史について遠山名誉会長に前事務局長の和田さんがインタビューいたしました。

和田 遠山名誉会長、17年間という長い間本当にお疲れ様でした。

本日、第16回JSTT定時総会で遠山名誉会長は執行体制から降りられました。平成元年の非開削技術センター発足以前から17年間にわたりお疲れ様でした。今年で遠山名誉会長も80歳ですが、まだまだお元気でいらっしゃるの、今後ともご助言いただきたく存じます。

ところで遠山名誉会長は当協会の設立にあたってはたいへんご尽力いただいたと聞いております。今となっては懐かしい思い出かと存じますが、当時の苦労話などを聞かせていただきたいと思います。

まずは、当協会の設立のきっかけからお聞かせください。

遠山 私が日本下水道事業団副理事長を勤めていた1984年ころ、英国大使館から1通の手紙が届きました。手紙の内容は、ロンドンにおいて環境衛生学会（IPHE）の主催により、非開削技術についての国際会議ならびに展示会（No-Dig大会）を催したいので協力を頼むということでした。

和田 そのころ、わが国の推進技術の発展には目覚しいものがあり、英国をはじめ、ヨーロッパの諸国も日



本の技術に興味をもっていたのでしょうね。

遠山 結果的にはそうだったのかもしれませんが。それ以前に私は英国大使館から英国が開発した新たな技術のいくつかを視察してほしい旨の協力依頼があり、ひとりで英国に乗り込んで方々を見学しておりました。そして今回は非開削技術という新たな分野で友達を得るチャンスを与えてくれるものと感じ、全国から30名を超す大部隊を組織して英国に乗り込みました。その結果、第1回No-Digの開催に大きく寄与することになり、日本は世界での信用を得ることになりました。

和田 そののはじめてのNo-Dig国際会議への参加はいかがでしたか？

遠山 当時は今のように格安チケットで海外一人旅が出来る時代ではありませんでした。30名を超える参加者のほとんどが海外旅行は初めてで、ましてや英語の論文作成などは困難極まりない難工事でした。今でも英語の論文には苦労しますが、当時はパソコンを使用してのパワーポイントなどもなく、すべてOHPフィルムに手書きをしておりましたので発表者の負担は現在よりも大変大きかったと思います。

和田 このIPHE主催のNo-Dig国際会議への参加が日本におけるJSTT・非開削技術協会の設立のきっかけとなったわけですね。

遠山 第1回No-Dig大会の成果を見て、今後このような大会を継続するためには、IPHEの軒下を借りて開催するようなわけには行かない。単独の協会をつくって、そこが専門に運営することを考えるべきだという結論に達し、1986年から新たな協会（ISTT）が発足し、トレンチレス・コンストラクションからトレンチレス・テクノロジーと名称を変えたのです。

和田 そこでISTTの日本ブランチとしてJSTTを組織することが必要と思われ、平成元年（1989）の設立



第1回No-Digで基調講演する遠山名誉会長



第1回No-Digレセプションにて（右から2人目がFlaxman会長）

に至るわけですね。

遠山 設立にあたっては、ISTTのメンバーとして加盟するために、下水道業界だけでは認められないことから、電力、ガス、通信、水道の各業界の総意をもって設立することが不可欠でした。そこで奥村組の石田さん、三井建設の中本さん、機動建設工業の木村さんたちが各業界の担当者あてに何度も足を運び、JSTTへの参加を説得いたしました。そこには1990年に開催予定の国際会議No-Dig90大阪を成功させようという強い意気込みがあったものと思います。その結果、JSTTの趣旨に賛同いただき、設立にこぎつけることができました。

和田 No-Dig90大阪につきましては私も一参加者として参加しましたので昨日のことに鮮明に覚えています。初めての非開削技術の国際会議を日本で開



第1回No-Digカンファレンスディナー会場にて（右：石橋さん）

催するのですから、準備を含め、大変だったと思いますが・・・。

遠山 準備はまさに大変でした。毎晩、終電で帰宅し翌朝は誰よりもはやく事務局に着いてISTTからのFaxを読んで連絡を取り合いました。彼ら（英国）のビジネスタイムは我々の寝ている時間ですから、放っておくと2～3日があつという間に過ぎてしまいます。国内に向けると、なにしろ協会（当時は非開削技術センター）設立まもなくのビッグイベントであり、参加者をいかに集めるかで奔走したものでした。そんな苦勞を知っているISTTの当時のフラックスマン会長が日本に来てこの大会の成功に大いに喜んでくださったのが印象的です。結果的には1000人を超える参加者を集めることができ、大成功と言いたかったところでしたが、今だから言えますが、財政的には少々苦しかったことを思い出します。

和田 ところで遠山名誉会長はお生まれが台湾で、少年時代は台湾で過ごされたそうですが、そのころのお話をお聞かせください。

遠山 台湾で教師の息子として生まれ、終戦で本土に引き上げるまで台湾で過ごしました。大学も台北大学



No-Dig大阪開会式



JSTT設立総会

に入学しましたが、飛行場を作りたいという夢がありましたから、土木を専攻しました。ところが入学したその日の午後、徴兵にとられてしまったのです。内地では理工系の学生は兵役を免除されていたそうですが、台湾はそういう恩恵もなかったのです。

それが昭和20年3月で終戦の年のことでしたが、戦後田舎（熊本県吉野村）に帰って、農業の手伝いをしていたのです。父から大学ぐらいは出てほしいといわれ、九州大学の門を叩いたのが21年4月のことです。これは台北大学からの転入学ということで、試験を免除されていました。もし試験があったら落ちていたかもしれませんね。

和田 遠山名誉会長といえば「ゴルフの達人」。国際会議の合間を縫って、海外でのゴルフは多くコースをラウンドされたと伺っておりますが。

遠山 ゴルフ好きなら、ゴルフの4大大会、全英オープンの開催されるセント・アンドリュースへ一度は行ってプレーしたいと思うでしょう。たまたまですが第1回の参加メンバーはゴルフ気違いばかりで、さっと話がまとまりました。このコースは参加することに意義があるといった状況で、ラフの凄さ、蛸壺のようなバンカー、風の荒れようなど、さすがにセント・アンドリュース、オールド・コースは感慨深いものでした。さらに、ホテルはジャックニクラウスの常宿で驚いたわけですが、なんと私の部屋のシャワーが出ませんでした。フロントに電話をして「これで帝王ジャックニクラウスは満足していましたか?」と問えば直ちに修理しますと直してくれたのです。

もうひとつは、第2回のNo-Digの時でしたが、ロンドン到着の日の午前中は休憩時間に割り当てていたものの、飛行機の中で急に話がまとまり、参加者の一人がメンバーだというゴルフ場に頼んで駆けつけることにしました。しかし、飛行機の着陸の20分後にスタートというタイトなスケジュールであり、ロッカールームで着替えなどするような時間の余裕がなく、ヒースロー空港で荷物を受け取り、その場で着替えをし、ゴルフ場に駆けつけたものでした。好きこそもののなんとやらで、今思えば間違い集団の海外視察団だったと思い出します。

和田 ゴルフの思い出は尽きることがないと思います。私の在職中には2回しか一緒にプレーすることができなかったのが残念ですが、その経験が今では弾みとなって、私のゴルフ熱はへたくそながらも上昇中です。

それでは最後になりますが、遠山名誉会長には、今



Flaxman会長親子（遠山名誉会長をはさんで）とロンドンのゴルフ場にて

後ともお身体を大切にしていきたいと思います。そして引き続きJSTTの活動内容についてご意見番の名誉会長としてご指導をいただきたいと思います。そこで、JSTTまたは非開削技術に携わる我々後輩へのエールを頂戴できればと思います。

遠山 現在の非開削技術を取り巻く状況は決して芳しいものではありませんが、みなさんにもう一度奮起していただき、日本の経済を非開削技術によって活性化して欲しいと願います。日本の非開削技術にはそれだけの力があると私は信じています。そして私の希望としましては、もう一度、非開削技術国際会議No-Dig大会を日本で開催できる日が訪れることを期待しています。

今後も当協会会員各位または非開削技術にかかわる皆さんの発展、繁栄を祈念して結ばさせていただきます。

和田 力強いお言葉ありがとうございました。是非、日本でもう一度No-Dig国際会議を開催できるように会員各社とともにがんばりたいと思います。



程ヶ谷カントリー倶楽部にて